

ゼフィルスの卵

蝶の中には、卵から成虫まで一生を通じて樹上で過ごし、地上まで下りてこないで樹の上で生活するものがあります。ミドリシジミの仲間がその代表です。ゼフィルス(ゼフィという人もいます)ゼフィルス(Zephyrus)とは、ギリシャ神話の西風の神ゼピュロスにちなんだもの。卵で越冬し6月から7月に出現する樹上性のシジミチョウの一群のことで、分類学上レベルが低かった時代に、樹上性のシジミチョウの仲間を総括して Zephyrus と呼んでいたのが始まりで日本には25種います。このゼフィルスに属するシジミチョウの雄は、木の枝の先端などで縄張りを張り、同種のチョウの雄が進入して来ると追いかけて縄張りから排除する習性を持ち、一般に翅が縦に長く、森林性が強い。ほとんどの種がブナ科植物を食べ、卵で越冬します。越冬する卵によってはグリセリンなどの糖アルコールを貯蔵しているものもあるそうです。つまり、水は0℃で固体になりますが、他の成分が混じると固まる温度はなおずっと下がるのです。それによってもっと寒さに強い卵になるのです。

メタリックなはねの色が美しい蝶が多いので小さいけれど目を引きまします。ゼピュロスは笛の名手で、その神がシルクロードを伝って日本にたどりついて奈良薬師寺五重塔の飛天になったともいわれています。ゼピュロスは、英語でゼファー。西風、そよ風のことです。スペイン語では、セフィーロ。ゼファーガンダムも、それにちなむ命名とか。クヌギ林にいるウラナミアカシジミ、アカシジミ、雄の翅が緑色に輝くミドリシジミ、メスアカミドリシジミ、ルリ色のダイセンシジミ、裏面が金色のウラキンシジミ、その他オナガシジミ、ムモンアカシジミ、ウスイロオナガシジミ、ウラクロシジミなどがその仲間です(親称としてはゼフィルスでも良いのですが、もうゼフィルス類という呼び方はしていません)。

成虫はそのほとんどが樹の葉におりた露を吸って、花の蜜はクリの花などごく限られたものしか吸いません。卵は木の芽や枝に産卵しますが、ある種のものには地上十数メートルの梢の花芽に生みます。寒風に晒された卵は、芽が萌えだすとともに孵化します。このような神秘性のため、蝶愛好家からよく狙われます。

日本産ゼフィルス25種

ウラゴマダラシジミ *Artopoetes pryeri*ウラキンシジミ *Ussuriana stygiana*チョウセンアカシジミ *Coreana raphaelis*ムモンアカシジミ *Shirozua jonasi*アカシジミ *Japonica lutea*キタアカシジミ *J. onoi*ウラナミアカシジミ *J. saepestriata*オナガシジミ *Araragi enthea*ミズイロオナガシジミ *Antigius attilia*ウスイロオナガシジミ *A. butleri*ダイセンシジミ *Wagimo signatus*ウラクロシジミ *Iratume orsedice*ミドリシジミ *Neozephyrus japonicus*メスアカミドリシジミ *Chrysozephyrus smaragdinus*アイノミドリシジミ *C. brillantinus*ヒサマツミドリシジミ *C. hisamatsusanus*キリシマミドリシジミ *Thermozephyrus*(*Chrysozephyrus*) *ataxus*フジミドリシジミ *Shibataniaozephyrus fujisanus*ウラジロミドリシジミ *Favonius saphirinus*オオミドリシジミ *F. orientalis*クロミドリシジミ *F. yuasai*エゾミドリシジミ *F. jezoensis*ハヤシミドリシジミ *F. ultramarinus*ジョウザンミドリシジミ *F. taxila*ヒロオビミドリシジミ *F. latifasciatus*

ブナ科を食べないゼフィルス

ウラキンシジミ：モクセイ科のトネリコ。オナガシジミ：クルミ科のオニグルミ。

チョウセンアカシジミ：モクセイ科のトネリコ。

ムモンアカシジミ：ブナ科のナラ類を食べるが、アブラムシおよびその蜜を食べる半肉食性。

ミドリシジミ：カバノキ科のハンノキ。

メスアカミドリシジミ：バラ科のサクラ。

ブナ科を食べるゼフィルスのなかでも、コナラ属を好む種、ブナ属を好む種などがある。

ゼフィルスはおもに3群に分けられる。

1群：ウラキンシジミ、ウラゴマダラシジミ、チョウセンアカシジミ、ムモンアカシジミ

2群：アカシジミ、オナガシジミ、ダイセンシジミ、ミズイロオナガシジミ

3群：ウラクロシジミ、オオミドリシジミ、キリシマミドリシジミ、フジミドリシジミ、ミドリシジミ、メスアカミドリシジミ、これは進化の度合いを表しており、1群が低く、3群が高いとされる。オス・メスによる形態の差が著しいものが進化レベルが高いとみなされる。

ジョウザンミドリシジミ(定山緑小灰蝶)



ジョウザンミドリシジミ (*Favonius taxila taxila*) は、ハヤシミドリシジミと同じオオミドリシジミ属の山地性ゼフィルスで、和名のジョウザン(定山)は、北海道の名勝地定山溪で最初に発見されたことになむ。ブナ科のミズナラやコナラ林に生息。体の大きさに比べて頭部が大きく、前翅先端はやや鋭角気味となり、林内を俊敏に飛翔する青緑色のシジミチョウ。翅裏は灰色地で、暗灰色の縁取りを持つ白帯が縦に走る、ミドリシジミ類では一般的な模様。Favonius属の他のミドリシジミと同様、雄の翅表の光沢は青みが強く、野外での同定は訓練が必要。とくにエゾミドリシジミと似る(本種の方が尾状突起が長く、白帯は後翅肛角にいくにしたがって細くなる)。

蝶の一生は大まかに分けると、卵(たまご)、幼虫(ようちゅう)、蛹(さなぎ)、成虫(せいちゅう)の4ステージあります。これはよく教科書などで見られる説明ですが、実際にはもう少し細かく分けてみる事が出来ます。このステージを更に細かく見てみると、次に様になります。

卵→1齢幼虫→2齢幼虫→3齢幼虫→4齢幼虫→5齢幼虫→蛹→成虫

卵から孵化(ふか)した1齢幼虫は、卵の殻を食べてから、餌となる植物を食べ始めます。体が大きくなった幼虫は脱皮(だっぴ)をして、2齢幼虫になり、また植物を食べて大きくなった幼虫は脱皮をし、このパターンをくりかえして、3齢幼虫、4齢幼虫、と大きくなっていきます。齢数は蝶の種類によって異なりますが、少なくても4齢(シジミチョウなど)、多くても12まであります。幼虫が最後の食事を終えると、蛹になる準備に入ります。糸で台座を作り、背中には帯糸(たいし)という紐みたいなものをかけて、じっとします。これを前蛹(ぜんよう)といいます。しばらくするとまた脱皮をして今度は蛹になります。やがて蛹から成虫が出てきます。これを羽化(うか)といいます。

生存率(せいぞんりつ)蝶の各ステージで、蝶がどれくらい生き残ったかを調べた人がいます。ここで紹介している数字はナミアゲハがどのように生き残っていったかをまとめたものです。数字は伐採跡地(ばっさいあとち)にあるカラスザンショウ100本あたりにナミアゲハの第一世代がどれほど生き残っているかを、渡辺さんという人が6年間調べて平均したものです。

◆卵(たまご) (95. 3個)

【主な天敵】

寄生蜂(アゲハタマゴバチ)、ダニ類、クモ類、カメムシ類、アリ類、カンタン、ツユムシなど

生存率(せいぞんりつ)【主な天敵】

クモ類、カメムシ類、アリ類など

◆3令幼虫

(8. 4頭)【主な天敵】

クモ類、アシナガバチ、病気など◆4令幼虫

(2. 6頭)

【主な天敵】アシナガバチ、病気、鳥など◆終令幼虫、5令幼虫 (1. 8頭)

【主な天敵】

アシナガバチ、鳥など

◆蛹(さなぎ)

(1. 6頭)【主な天敵】寄生蜂(アゲハヒメバチ)など。羽化失敗もある。

◆成虫(せいちゅう)

(0. 6頭)